

広島平和礼拝

2019

8月5日(月)から6日(火)に「広島平和礼拝2019」が行われました。「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます(フィリピ4:9)」が今年の主題聖句でした。

初日は、平和記念公園内にある供養塔前でカトリック教会と共に「祈りのつどい」を行いました。その後、平和行進を行い、カトリック世界平和記念聖堂で行われた「平和祈願ミサ」に出席しました。

2日目は、広島復活教会で「広島原爆逝去者記念聖餐式」が捧げられました。その後、杉山武郎さん(ヒロシマを語り継ぐ教師の会・会長)による「被爆証言」が行われました。参加者一人一人が「祈り」と「学び」の中で、原爆の出来事を心に刻みながら過ごせた2日間だったように感じています。私が印象的だったことの

一つは、「平和祈願ミサ」に出席したこと。説教者はアメリカ出身のカトリック那覇教区のウェイン・フランシス・バートン司教でした。バートン司教は、アメリカ人である自分が、日本人の私たちに「原爆の日」に説教をすること、そしてミサの司式が



何故できるのかを語っておられました。バートン司教は「それは、私が神様の子ともだからです。」と述べられました。そして、「皆さんも神様の子ともなのです」と語ります。私たちは、歴史の中で生きています。その為、戦争という視点で考えた時、「加害者」の側であり、「被害者」の側にもな

りえます。しかし、全ての人が「神様の子とも」であること信じられた時、隔てを乗り越えて同じ地平に立つことができるのかもしれませんが、神様は、全ての人を愛してください。バートン司教は、「平和の神はあなたがたと共におられます。」この「あなたがた」という言葉には、全ての人が含まれていると改めて思うことができました。そして、日々の生活の中で「キリストの平和」を実行していきたいと感じた「広島平和礼拝」でした。

（広島平和礼拝実行委員・
執事 永野拓也）

特別企画・海外通信

ノートルダム

大聖堂への祈り

2019年4月15日、フランス・パリ中心部にあるノートルダム大聖堂で、大規模な

火災が発生してから半年になります。(執筆時点では4ヶ月経過)

世界遺産に登録されているノートルダム大聖堂は、パリ

発祥の地と言われるシテ島にあり、世界中の観光客を魅了してきました。また、パリの象徴・パリ市民の心とも称される建造物であり、完成に200年を費やし、800年以上パリを見守ってきた存在です。

週末にイースターを控えた中での火災に、フランスの人々の受けた衝撃はあまりに大きく、火災当時、消火活動を見守りながら、聖歌を歌い、ひたすら祈り続ける人々の姿も多く見られました。また4月17日には、火災が発生した時刻に合わせ、フランス各地の教会や大聖堂が鐘を一斉に鳴らして、連帯を示しました。そして6月15日には、ノートルダム大聖堂で火災後初のミサが、少人数に制限された中、ヘルメット着用の上で行われ、希望の光が差し込んできた感じがしました。

これから少しずつ、順調に再建への道筋が整っていくかと思われていた矢先、火災によって崩れ落ちた屋根や尖塔などに使われていた400トンもの鉛が溶け出して飛散、周辺が汚染されていたことが

わかりました。その対処に追われ、再建のための作業は一時中断されました。そして今も、大聖堂崩落の危機は去っていません。

甚大な被害を受けたノートルダム大聖堂の姿に、その衝撃は世界中に広がり、多額の寄付が表明されています。2024年のパリ・オリンピックを意識しての事か、5年内の再建を目指すとの話もありました。しかしそれらのことが重なり、昨年より続いていた反政府デモが、「生活に苦しむ国民を先に救うべきだ」と過激化するという一幕もありました。

「大聖堂は永遠にそこにあると思っていたのに！」と嘆くフランスの人々の言葉を聞くと、壮麗で雄大な大聖堂の姿がはつきりと思い起こされます。フランスの作曲家、メシアンのオルガン曲《永遠の教会の出現》という作品も、このような大聖堂の姿を想いながら作曲されたのではないかと勝手な想像をしながら、今日も私の心はフランスに飛んでいきます。

（井原由紀・
浜田基督教教会信徒）